



Title	青年期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する捉え方の発達的変化：面接調査に基づく探索的なモデル作成の試み
Author(s)	大嶽, さと子; 多川, 則子; 吉田, 俊和
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 179-185
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4959
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

青春期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する 捉え方の発達的变化 面接調査に基づく探索的なモデル作成の試み

大嶽さと子(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)
多川則子(名古屋経済大学短期大学部保育科)

吉田俊和(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

本研究では、青春期女子が特定の友人グループと多くの時間を一緒に過ごす傾向をもつことに着目し、女子短期大学生 11 名に対して面接調査を実施した。先行研究より、青春期前期と青春期後期とでは友人関係の様相が異なるとされるため、実際の行動水準として「ひとりぼっち回避行動」についての捉え方がどのように異なり、どのような変化を遂げてきたのかを尋ねた。得られたデータからテクストを作成し、類似した部分をヴァリエーションとして集めて概念を設定した後、探索的なモデルを生成した。その結果、青春期前期にはグループ成員が互いに束縛し合う傾向をもち、一緒にいることで得られる安心感と、形として群れている状態への漠然とした不安感とが共存していることがわかった。青春期後期になると、ほどよいゆるやかな友人関係を習得し、情緒的にも道具的にも満たされた主観的な満足感を獲得することが示唆された。

キーワード: ひとりぼっち回避規範、ひとりぼっち回避行動、青春期女子、友人グループ、面接調査

問題と目的

青春期の学校生活における友人関係の特徴を捉える研究の中で、女子友人グループに着目したものがいくつかみられる(三好, 1998; 佐藤, 1995)。例えば三好(1998)は、「多くの女の子たちが学校生活の中で特定の同性友人グループに属し、多くの時間を決まったメンバーと一緒に過ごしている」と述べている。またその行動特徴として、特別教室での授業の際に一緒に教室を移動したり、休み時間に連れ添ってトイレに行ったり、昼休みには机を寄せ合って弁当を食べたりしている、ということが挙げられている。女子友人グループは、このような親密な行動特徴だけでなく、ほかのグループ成員をまったく受け入れない排他性も見受けられ(三島, 2003)、こういった女子の「グループ化問題」は教師からの介入・指導の難しさや、学級運営への影響といった点からも指摘されている(中村, 1998; 岡崎, 1998; 酒井, 1998; ヴィヒヤルト, 1998)。また、多くの研究において友人との関わり方には性差がみられるとされ(落合・佐藤, 1996; Sherrod, 1989)、親密で排他的な行動特徴は、女子特有のものであるとも推察される。

また、上述のような友人グループの存在は、青春期女子にとって必然的なものであり、自我発達の面においても不可欠なものであるとされてきた(長尾, 1997; 須藤, 2003)。そして、所属する友人グループが存在しない場合、当該環境においてうまく適応できていないことを示す(町沢, 2002)。青春期女子が友人グループに所属することは、当該環境における適応感を規定する重要な要

因の 1 つであるといえる。

その一方で、女子が友人グループに所属することは、1 人で過ごすことにより当該環境の中で浮いてしまうことを回避するための行動であるとする知見もある。特に中学生においては、友人グループに対して同調的な関わり方をすることが指摘されており、友人グループとは「一緒に過ごすかどうか」という状態が重要視されるという(落合・佐藤, 1996)。そのため、日向野・小口(2007)において示されているように、学校生活において自分だけが異なる行動をとることは、友人グループから排斥されるリスクを孕んでいるともいえる。男子の友人関係が、一般に一緒に遊べたり楽しめたりすることを重視するとされることと比べて、女子の友人関係は、一緒に過ごす状態そのものに重点を置き、集団から浮いてしまうというネガティブな結果を導き出さないための、防衛的な意味合いをもつということになる。

このような女子特有の友人関係の背景にあるものとして、大嶽(2007)は、「無理にでも友だちを作り、一緒にいなくてはいけない」と考える規範意識の存在を指摘し、これを「ひとりぼっち回避規範」とした。「ひとりぼっち回避規範」の高い者の特徴としては、学校生活において一人で行動することを恐れ、特に環境移行期においては自分が所属できそうな友人グループを活発に探索する。そして所属する友人グループを定めると、「ひとりぼっち回避規範」に基づいて頻繁に共行動(以下、「ひとりぼっち回避行動」とする)をとろうとする、とされる(大嶽・植村・吉田, 2006)。

この「ひとりぼっち回避規範」については、規範意識の程度が発達的に変化をするといった知見もある。大嶽(2006)では、中学生の方が高校生よりも「ひとりぼっち回避規範」が高い値を示していた。また、難波(2005)や高井(1999)においても、中学校生活を送る青年期前期と大学生活を送る青年期後期とでは、友人関係の様相が異なり、発達段階を経るにつれて徐々に変化を遂げていくとされている。例えば中学校生活を送る青年期前期は、女子は友人と理解しあい、共感し、共鳴し合うといった、お互いが1つになるようなことを望むような情緒的な側面を友人に求めるところ(落合・佐藤, 1996)。それにより、友人と行動を共にすることで安心感を得ることができる(長沼・落合, 1998; 佐藤, 1995など)。一方で、大学生活を送る青年期後期では何らかの目的や行動を共有するような関わり方が増えるとされ(難波, 2005)、青年期前期にもみられた情緒的な側面とともに、自分自身の学校生活をより楽しいものにしたり、授業や噂話などの必要な情報を持ち手に入れたりするための道具的な側面もみられるようになる(大嶽・多川・吉田, 2008)。このように友人関係の様相が変化していくということから、現実場面での行動水準である「ひとりぼっち回避行動」をなぜとるのかという点に対して、その捉え方も変化していくことが予測される。

そこで本研究では、「ひとりぼっち回避行動」についての捉え方がどのような発達的变化を遂げていくのか、女子大学生を対象に面接調査を実施することにより、探索的にモデルを生成することを目的とする。また、本研究では、青年期前期を中学時代、青年期後期を大学時代として設定する。なお、青年期前期については、面接対象である大学生に回顧的に尋ねる。

方法

調査対象

A 短期大学に通う2年生11名。A 短期大学は、カリキュラム上の都合から30名からなる学級制をとっており、入学時に編成された学級で2年間を過ごす。調査に参加した11名はいずれも同じ学級に所属し、事前に調査の趣旨を説明し、調査協力に対して快諾が得られた者である。

調査手続き

調査時期 2007年11月～12月に実施した。入学後1年半が経ち、学校行事や通常の授業を学級単位で過ごす中で、学級内での成員同士の相互作用が十分になされた後であると思われた。

調査内容 授業後を利用して、1名ずつ半構造化面接を実施した。面接は第一筆者自身が実施した。被面接者11名(ID1～ID11)と筆者とは、この面接調査時が初対面であった。面接は、原則としてあらかじめ作成したマニュ

アルに基づいて実施されたが、被面接者が自由に語ることができるように、話の流れによってできるだけ柔軟に質問の内容を変化させた。1人あたりの面接実施時間はおよそ30分であった。面接実施前に、被面接者にとって答えたくない質問には答えなくてもよいということをあらかじめ伝えた。また、より厳密な解釈をすすめるため、被面接者の承諾を得た上でICレコーダーに録音した。なお、本研究において録音を承諾しなかった被面接者はいなかった。

面接内容 面接時には、本研究に即した質問を含め、学校生活や対人関係に関するいくつかの質問をしているが、青年期前期と青年期後期における「ひとりぼっち回避行動」をとる意味づけの変化をどのように捉えているか、という質問に対して被面接者が語った内容を本研究では取り上げることにする。なお、青年期前期を中学時代、青年期後期を大学時代として設定し、青年期前期については、大学生に回顧的に尋ねた。具体的には、被面接者の答えやすさという観点から、「ひとりぼっち回避行動」をとる意味を直接的に尋ねるのではなく、現在の学校生活についていかに話してもらった後、「もしもこの学校と一緒にいる人がいなければあなたはどうしますか?」と質問し、さらに「それはなぜですか?」と尋ねることによって青年期後期に関する回答を得た。青年期前期については、上述の質問がなされた後、「それでは、あなたは中学時代だったらどうしたと思いますか?」と質問し、「なぜそのように思ったのですか?」と追加して尋ねた。

分析手続き

分析の理論的枠組み 本研究の目的に照らし合わせ、面接データをもとに木下(2003)の「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTAとする)」を分析の枠組みとして使用することにした。ただし、M-GTAはテクストの選択においてその選択理由を恣意的に定めた解釈をなし得るとされるため(小澤・藤山, 2007)、本研究では分析そのものは構造構成主義に基づく「関心相關的抽出」を採用することにした(西條, 2007)。構造構成主義における関心相關的抽出は、研究者の相対的な視点に偏ることなく、研究目的と研究者の視点の双方を相対化することが可能と指摘されており(荒川・サトウ, 2005)、少數事例に基づく探索的研究である本研究には適切であると思われた。

分析の実施 面接終了後、録音された内容からテクストを作成した。次に、分析テーマに関連する箇所をテクストから集め、類似した部分をバリエーションとして取り出し、概念名をつけた。例えば、「グループの境がはっきりしてたから、1人じやいづらいと思います(ID2)」「ほかのグループの子はほかのグループの子、自分のグループの子は自分のグループの子(ID8)」といったものがみら

Table 1 実際のワークシートの例

概念名	1人で過ごすことへの不安感
定義	自分が誰とも一緒に過ごしていないときに、周りからどのように思われているのかということを想像することからくる不安感
ヴァリエーション	ID2 中学のときは、怖かったんじゃないですかね。誰かが絶対そばにいて、1人でいるのはきついっていう気持ちが多分強かったんだと思います。誰かがいてほしいみたいな。周りからの目もあるし、自分の中でも「みんなは一緒にいるのに、今自分だけが1人だっていうのが…」恥ずかしいって気持ちがあったと思います。
	ID9 …でも周りは、「なんであの子1人でいるのかな」って思ってそうなのが自分も気になるし。自分もクラスにそういう子がいると、「何であの子1人かな」って思ったし。
	ID10 ((1人で過ごすことがあったときに))余計なこと考えちゃうのがいやだし、みんなでいた方が楽しいからみんなでいたいなって。
	ID11 中学のときは、誰もいなかったら周りの目が気になったんで、ほかの子を見つけて形だけでもとりあえず入れてもらって過ごしたと思いますね。中学のときは男子もいたんで、それが一番気になると思います。高校は女子クラスだったし。男子がいないと、考え方方が変わってくる。男子とかに「あいつきらわれてるー」って思われるのがいやで。

注) 概念名に準じていると思われる発言部分は波線部で、筆者による補足説明は(())で示す

れたため、誰がどのグループであるかについて意識していると考え、「誰がどのグループか」ということへの捉われ)という概念を作成した。またこの定義として「誰がどのグループに所属しているのかについてこだわり、明確にしようとしている」とした。1つの概念が生成されるごとに、概念名と定義、ヴァリエーションからなるワークシートを作成していく(Table 1)。なお、どのヴァリエーションを青年期前期、もしくは青年期後期についてのものとするかは、面接時におけるいずれの時期に関する質問に対する回答であるか、ということで分類した。また、例えば青年期前期の質問の際に、青年期後期の内容が含まれた場合は、被面接者に対して、いずれの時期の内容かをそのつど確認した。

結果と考察

上記の手順を踏み、すべてのテキストをもとにさらにいくつかの概念をカテゴリーとして設定し(Table 2)、発達段階を区別しつつ、青年期女子が「ひとりぼっち回避行動」の意味をどのように捉えているのかを構造化したモデルを生成した(Figure 1)。以下、結果としてのモデル図生成の流れとその考察を進める。概念名を()、カテゴリーを()で示す。

青年期前期について

「誰がどのグループか」ということへの捉われ)があり、グループごとに存在する越えられない壁 が存在していることがうかがわれた。グループ内では、「やたら『あんたあの子としゃべっちゃだめ』みたいな(ID4)」など、ほかのグループ成員と親密になることをよかれとしない束縛された関わり方の存在が示唆された。三好(2002)は、

この時期の女子友人グループは排他的で閉鎖的な関わり方をすることを示しており、今回の結果はそれをさらに裏付けるものとなった。また、大嶽(2007)は、「ひとりぼっち回避規範」の意識が高く、友人と一緒に過ごすことに過剰にこだわる者は、グループ成員がとる行動に同調しない成員が存在すると、自身の安全を脅かす者として認知し、強い不安を感じると述べている。つまり、上述のように成員を束縛することによって、自身の安全を保障しようとしているのかもしれない。一方で、「中学のときは形だけでもとりあえず入れてもらって過ごした(ID11)」とあるように、この時期の関わり方が安全を保障するための(形として一緒にいる安心感)に基づくものにすぎないということも示唆された。この背景には「周りの目もあるし、『みんなは一緒にいるのに、今自分だけが1人だっていうのが恥ずかしい』って気持ちがあった(ID2)」「あいつきらわれてる」って思われるのが嫌で(ID11)と(1人で過ごすことへの不安感)があることがうかがわれた。佐野(1988)でも、青年期の学校生活は昼休みに一緒に食事をとる相手がいるかどうかが重要であり、そのためにグループがあるともいえる、と述べられている。1人で過ごすことは、当該環境においてよりいっそう 壁が明確であるがゆえの1人で過ごすことの居づらさ を実感するのであろう。

「ひとりぼっち回避行動」について、上述のような捉え方をすることで、友人グループ内で日々感じる感覚 として「誰かと一緒にいることで得られる安心感」とともに「一番不安で、女っぽかった(ID4)」とあるように(形として群れている状態への漠然とした不安感)が共存することになる。このように、いわば対極ともいえる2つの感覚が共存することはきわめて不安定な状態といえるであろう。

Table 2 概念名とその発言データ例

カテゴリー	概念	発言データ例
グループごとに存在する越えられない壁	誰がどのグループかということへの捉われ	ほかのグループの子はほかのグループの子、自分のグループの子は自分のグループの子(ID8)
	ほかのグループ成員に対する排他性	中学校のときとかはホント捉われてた…略…今よりほかのグループの子にしゃべりかけにくかったかな。何か「あんたはほかのグループじゃん！」みたいな感じ(ID4)
	グループ成員に対する束縛	やたら「あんたあの子としゃべっちゃだめ」みたいな。ほかのグループの「ちゃん」とはしゃべっちゃだめ、みたいな。なんていふんだろ、縛り付けるじゃないけど、何かそういうのがあったから(ID4)
壁が明確であるがゆえの一人で過ごすことの居づらさ	個人内の感覚	中学のときは形だけでもとりあえず入れてもらって過ごした(ID11)
	1人で過ごすことへの不安感	・一番不安で、女っぽかった(ID4) ・周りの目もあるし、「みんなは一緒にいるのに、今自分が1人だっていうのが恥ずかしい」って気持ちがあった(ID2)
	他者視点の認知	自分もクラスにそういう子(1人で過ごす子)がいると、「何であの子1人かな」って思ったし。仲のいいグループの子とけんかしたんじゃないかなって思ったりするんですけど、私もそういう風に探られるって感じに、噂話にされるのがイヤだし(ID9)
グループ内で日々感じる感覚	形だけで群れている状態への漠然とした不安感	中学のときは、怖かったんじゃないですかね。誰かが絶対そばにいて、1人でいるのはきついっていう気持ちが多分強かったんだと思います。誰かがいてほしいみたいな(ID2)
	誰かと一緒にいることで得られる安心感	中学の頃は、群れてれば安心、みたいな。小学校から仲のいい子がいるから、昔は行動が一緒ならうれしい(ID1)
	グループ内での葛藤頻発	6人とかでいても、6人の中の2人、とか、そういうのが多かったかな。でもそういうのも時期とかで仲がどうのってのがあって、そういうのばっかりですね(ID11)
	壁を越えられない逃げ場のなさ	何か壁があるかな。行っちゃいけない、みたいな。ほかのグループに(ID4)
ゆるやかな壁をもつ自由な関わり	無理に一緒にいなくてもいい捉われのなさ	今は固まってるけど、無理に一緒にいるわけではなくて(ID5)
	1人でいるときがあってもいいのだという発見	今は1人でも大丈夫。壁がないし(ID2)
大人としての視点	みんな大人になったんだという感覚	人間同士関われるようになった(ID1)
	誰かが受け容てくれるはずだという自信の形成	自信過剰かもしれないんですけど、自分がいけば、受け容れてくれるんじゃないかなってのがあって(ID3)
主観的な満足感の獲得	情緒的満足感	今の方が友だちに対して思う気持ちが深くなったかも。あってくれてありがとう、みたいな(ID1)
	道具的満足感	いろんな人と知り合って、いろんなことを知って、自分のためにどんどんいろんな世界を知れたらいいなってのがあって(ID3)
“つきあい方”的習得	ある程度距離を調整しあう	・((嫌なところがあったら))そのときに距離置けばいいし、納得したらまた近づけばいいし(ID5) ・自分がこうしたら友だちと付き合うのが楽なんだなってのを勉強した(ID8)
	もめるぐらいなら自分を抑える	もめそうなときもあるけど、事が大きくなつて收拾がつかなくなるのはみんなイヤだと思うから、我慢する気がする(ID9)

注) 調査対象者のIDは()で、筆者による補足説明は(())で示す

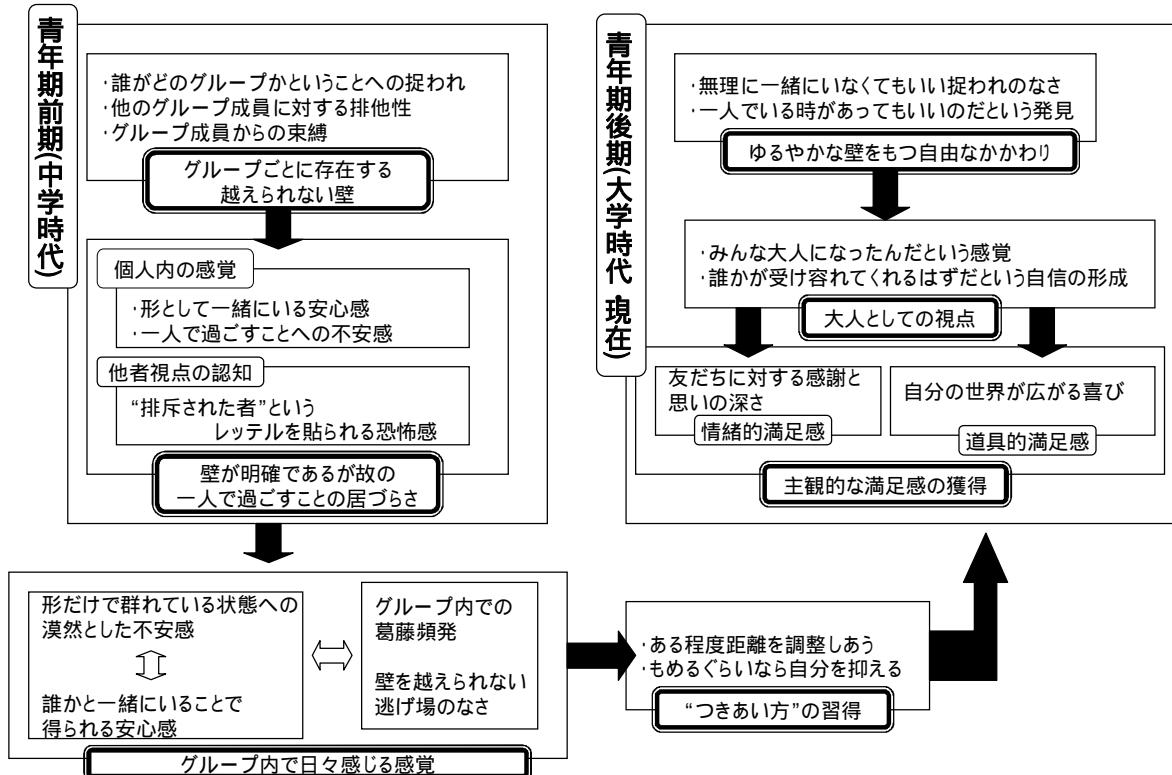


Figure 1 「ひとりぼっち回避行動」の意味づけと発達的変化のモデル

大嶽・植村・吉田(2006)では、友人グループに所属することにより、当該環境における適応感は得られるが、対人葛藤は高いレベルで保持され、長期的にみるとストレスフルな状態に陥ると指摘されている。(壁を越えられない逃げ場のなさ)が、より高ストレス状況をもたらしているといえよう。

青年期後期について

前期から後期に移行するにつれ、日々の葛藤の中で次第に“つきあい方”的習得が可能になることが示された。「(嫌なところがあったら)そのときに距離置けばいいし、納得したらまた近づけばいいし(ID5)」「自分がこうしたら友だちと付き合うのが楽なんだなってのを勉強した(ID8)」とあるように、次第にどのような距離感で関われば円滑であり、高ストレス状況に陥らないのかということを習得していくのである。青年期前期にみられた越えられない壁は「ゆるやかな壁をもつ自由な関わり」となり「今は固まってるけど、無理に一緒にいるわけではなくて(ID5)」という(無理に一緒にいなくてもいい捉われのなさ)を感じるようになる。同時に「今は1人でも大丈夫。壁がないし(ID2)」などと、「1人でいる時があってもいいのだという発見」もしている。このように、形として一緒に過ごすのではなく、「人間同士関われるようになった(ID1)」という(みんな大人になったんだという感覚)が得られるようになるのだろう。また、「自信過剰かもしれない」でけ

ど、自分がいけば、受け容れてくれるんじゃないかなってのがあって(ID3)」と、「誰かが受け容れてくれるはずだという自信の形成」がなされている。このような関係性を築く中で、「あってくれてありがとう、みたいな(ID1)」といった(友だちに対する感謝と思いの深さ)からなる「情緒的満足感」が得られる。このことは多くの先行研究で示されていることと同様に、青年期を通して精神的安心を得るための情緒的な関係を求めることが本研究でも示唆された。また青年期後期特有のものとしては「いろんな人と知り合って、いろんなことを知って、自分のためにどんどんいろんな世界を知れたらいいなってのがあって(ID3)」という(自分の世界が広がる喜び)からなる「道具的満足感」の獲得がうかがわれた。このことは大嶽・多川・吉田(2008)においても、情報収集などの道具的な志向性の存在が指摘されている。よって後期になると、ほどよい距離感を保つ中での「主観的な満足感の獲得」が可能になるような関わりの成立が示唆された。

まとめと今後の課題

本研究により、青年期前期と青年期後期とを比較した場合、「ひとりぼっち回避行動」をとることの捉え方は変化し、強くこだわった友人関係からほどよくゆるやかな友人関係に変化していくことが示唆された。青年期女子は第三者からみれば、青年期前期も青年期後期も、グループで固まり、いつも一緒に行動していると認知されるが、行

動の捉え方には違いがみられることがわかった。

最後に、本研究の問題点を挙げておく。1つは調査方法である。青年期前期に関しては中学時代を回顧的に振り返ってもらい、まとめるという方法をとったが、あくまでも青年期後期の視点から捉えているため、認知そのものが青年期前期の頃とは異なるものであり、ひずみが生じている可能性は否めない。

また、2つめとしては、面接調査時における質問は「もしも学校で一緒にいる人がいなかったらあなたはどうしますか?」と尋ね、さらに「それはなぜですか?」と尋ねるという方法でなされた。しかし、この方法では「ひとりぼっち回避行動」の捉え方を検討するという本研究の目的に見合ったデータが得られたかどうか再検討する余地がある。

3つめとしては、語られた内容が青年期前期のことなのか青年期後期のことなのか、という点で判断しかねるものもみられ、これに関しては、本来時間は途切れることなく流れ続けているものであるということから考えると、日々変化を遂げていく友人関係を青年期前期と青年期後期に切り分けることが適切かどうかかも含め、今後の課題したい。

また、本研究はあくまでも探索的なモデル作成を試みたに過ぎない。今後は、量的研究もふまえながら、本研究において探索的に作成されたモデルの妥当性を示し、実証していくことが必要であろう。

引用文献

荒川 歩・サトウタツヤ (2005). セク融・学融を妨げる要因の検討と構造構成主義による解決の可能性とその適用範囲 立命館人間科学研究 **9**, 85-96.

日向野智子・小口孝司 (2007). 学級集団内地位とパーソナリティ特性からみた対面苦手意識 実験社会心理学研究 **46**, 133-142.

木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い 弘文堂

町沢静夫 (2002). 学校、教師、生徒のための心の健康ひろば 駿河台出版社

三島浩路 (2003). 親しい友人間にみられる小学生の「いじめ」に関する研究 社会心理学研究 **19**, 41-50.

三好智子 (1998). 女子友人グループに関する一研究 対グループ態度の評価尺度作成の試み 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, **2**, 85-94.

三好智子 (2002). 女子短大生の同性友人グループとの関わりにおける自己の個別性のあり方 イメージ画を用いた検討 青年心理学研究 **14**, 1-19.

長尾 博 (1997). 前思春期女子の chum 形成が自我発達に及ぼす影響 教育心理学研究 **45**, 203-212.

長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 35-47.

中村泰子 (1998). 女の子のトラブル解説法 思春期の普通の女の子の生活と心 月刊生徒指導, 1月号, 12-17.

難波久美子 (2005). 青年にとって仲間とは何か 対人関係における位置づけと友だち・親友との比較から 発達心理学研究 **16**, 276-285.

落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究 **44**, 55-65.

大嶽さと子 (2006). 「ひとりぼっち回避規範」が中学生の対人関係に及ぼす影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科平成15年度修士論文(未公刊)

大嶽さと子・植村善太郎・吉田俊和 (2006). 「ひとりぼっち回避規範」と学校適応感との関連 対人葛藤方略に着目して 日本グループ・ダイナミックス学会第53回大会発表論文集, 150-151.

大嶽さと子 (2007). 「ひとりぼっち回避規範」が中学生女子の対人関係に及ぼす影響 面接データに基づく女子グループの事例的考察 カウンセリング研究, **40**, 267-277.

大嶽さと子・多川則子・吉田俊和 (2008). 青年期女子の「ひとりぼっち回避行動」に関する研究 面接調査による探索的研究 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, 466.

岡崎 効 (1998). 気泡のように発生する女子の問題行動 私の処方箋 月刊生徒指導, 1月号, 40-43.

小澤和輝・藤山直樹 (2007). 心理学における質的データに関する一考察 「構造構成主義」と精神分析の観点から 上智大学心理学年報 **31**, 57-64.

西條剛央 (2007). ライブ講義・質的研究とは何か 研究の着想からデータ収集、分析、モデル構築まで 新曜社

酒井 徹 (1998). 女の子どうしのいじめ 月刊生徒指導, 1月号, 26-29.

佐野洋子 (1988). 友だちは無駄である 筑摩書房

佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, **3**, 11-20.

Sherrod, D. (1989). The influence of gender on same sex friendships. In C. Hendrick(Ed.), *Close relationships*. Newbury Park, CA: Sage. pp.164-186.

須藤春佳 (2003). 前青年期の親しい同性友人関係 “chumship”的心理学的意義について 発達的・臨床的観点からの検討 京都大学大学院教育学研究科紀要, **54**, 626-638.

高井範子 (1999). 対人関係性の視点による生き方態度の発達的研究 教育心理学研究 **47**, 317-327.

ヴィヒャルト千佳子 (1998). 先生に見えない女の子たち 月刊生徒指導, 1月号, 18-21.

註

本研究実施にあたり、調査協力を快くお引き受けくださった A 短期大学の教職員や学生のみなさまに、心より御礼申し上げます。

**The developmental changes of social isolation avoidance behaviors
in adolescent girls:
Modeling from an interview**

Satoko OHTAKE(*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

Noriko TAGAWA(*Department of Early Childhood Education, Nagoya Keizai University Junior College*)

Toshikazu YOSHIDA(*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

This study has examined an interview to 11 women participants of the junior college students, based on the tendency of adolescent girls to spend many times with particular informal group members. Previous studies had suggested that the relationships with same-sex friends have the different meanings from early and late adolescence. So, in this study, participants were investigated how the meanings of social isolation avoidance behaviors as the standard of real actual behaviors differs and changed from early period to now. We have drawn up the texts from these data, made up the concepts by gathering parts of similar words as several variations and developed one exploratory model. As the results, it is suggested that the early adolescent girls has a tendency to restrict each other among members of the group, and holding a feeling of safety by spending together, but also the vague anxiety that is formed from their crowding group situation. But, at the late adolescent, they have learned moderate relationships among them, and acquired the subjective satisfaction filled emotionally and instrumentally.

Keywords: social isolation avoidance norms, social isolation avoidance behaviors, adolescent girls, informal group, interviews.